

執筆者紹介

金 文 京（鶴見大學文學部日本文學科教授）

埋 田 重 夫（静岡大學學術院人文社會科學領域教授）

稻 畑 耕 一 郎（文學學術院教授）

井 上 一 之（群馬縣立女子大學文學部國文學科教授）

丸 井 憲（早稻田大學非常勤講師）

高 山 亮 太（博士後期課程在學中）

千 葉 謙 悟（中央大學經濟學部准教授）

遠 藤 雅 裕（中央大學法學部教授）

平 田 眞 一 朗（山梨大學非常勤講師）

編集後記

◇ 本誌も歳月を重ねて第四十二期となった。創刊当初から関わってきた一人としてそれなりの感慨がないでもない。

◇ 中文専修が創設され、その運営も軌道に乗ってきたころ、文學研究に傳統のある文學部の中だけでなく、對外的に見ても後發の學科として出された早稲田中文も、研究成果やその活動を自前の雑誌で世に問うていくことが必要ではないかという機運がおこり、本會が組織され、その旗艦誌として誕生したのが本誌である。

◇ 創刊当初は研究職についている卒業生もなく、雑誌の維持には經濟的な事情の他に、然るべき論文を書くことで質を維持していくことを半ば義務付けられていた教員が毎期書くということになつていった。

◇ やがて若手の研究者も増えて維持會員制度はなくなり、寄稿が増えるに従つて査讀制度なども整備され、いよいよ學會誌らしくなり、斯界でも一席を占めているようであるのは同慶の至である。

◇ この間、原稿もいつのころからか判讀に難澁する手書きからスマートなPCへと變わり印刷も活版からプリントに代わつた。刊行の事務が省力化できたことで多大な恩恵に浴してはいるが、老一代としては編集時の熱氣や誌面から凹凸感が消えた寂しさもある。

◇ 凹みなく私たちが取り圍む社會の事情は著しく變つた。今日の中國の姿を當時に想像できた人はいなかつたはずである。桑田滄海という言葉は書物の上でよく見かけるが、そのことが現實に目の前で起こっているのかと思うこともある。

◇ そうした激しい時の流れのなかでも、會員諸氏の熱意と精進によつて本誌が輝きを失うことなく、さらに價値あるものとして發展していくことを願つてやまない。

（禾）